

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 3 年 10 月 4 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 16名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	4名	

※事業所記入

事業所番号	3890101516
事業所名 (ユニット名)	グループホーム ガリラヤ久米 西通り1丁目1番地
記入者(管理者) 氏名	上田 稔
自己評価作成日	令和 3年 9月 1日

<p>【事業所理念】</p> <p>『今、ここで生きている 人々に寄り添うことを使命とする』</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】</p> <p>①介護計画について、職員それぞれが把握できていない。ケアプランの実施チェックと関連した記録が残っていない。 ・介護計画について、最新のものを職員がすぐ手にとれる場所にファイリングし、閲覧しやすいようにしている。 ・記録シートの備考欄に、ケアプランに関連した記録が残せるように周知している。 ②運営推進会議や避難訓練をきちんと実施しているが、運営推進会議に参加していない家族や地域の方に内容が周知できていない。 ・運営推進会議の報告を同封予定であったが、どのように周知するか検討中。 ・避難訓練の写真を、ほのぼの通信に掲載し、全ての家族に様子を確認していただく予定であったが、コロナウイルス感染症の為、利用者が不参加の為、写真が撮れていない。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】</p> <p>事業所は市中心部から少し離れた郊外にあり、小規模特別養護老人ホームやデイサービスなどの3階建ての複合施設の1階にある。建物内は広く、事業所の案内には、「のんびりと穏やかに 安心して過ごせる空間づくり」が掲げられ、高齢化や認知症の進行等に伴い、利用者自身ができることは減ってきているものの、可能な範囲で利用者や家族の要望に応じながら、柔軟な対応をしている。現在のコロナ禍において、外出制限や面会制限が設けられているものの、近隣にある神社まで散歩したり、人混みを避けてドライブに出かけたりするなど、利用者は気分転換ができています。また、SNSを活用したオンライン面会や扉越しでの面会に対応したりするほか、今後はマスク着用で仕切り版を設置した面会ができることを検討している。コロナ禍以前には、誕生日に利用者が行きたいところに行けるよう支援しており、美術館や砥部焼の絵付け、ペットとのふれあいコーナーに出かけるなど、利用者や家族に喜ばれている。さらに、お花見弁当や祝い膳、忘年会時の寄せ鍋、季節に応じて焼き芋やそめんなどを取り入れたり、干し柿づくりや餅つき、すいか割など行事やレクリエーションを実施したりするなど、利用者が楽しめるような支援もしている。加えて、法人・事業所として、働きやすい勤務形態に対応するなど、働きやすい職場環境づくりに努め、人事異動はあるものの事業所の開設以来、退職者は一人も出ていない。</p>
--	--	--

評価結果表

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	認知症の進行に伴い、会話やコミュニケーションが難しくなっている。家族の意向や本人の表情や様子を観察する事で、希望や意向の把握に努めている。	◎		◎	日々の生活の中で、職員は利用者から思いや意向を聞き取るよう努めている。利用者の高齢化や認知症の進行等に伴い、把握することが難しい利用者には、生活の様子を観察しながら思いを汲み取ったり、家族や以前利用していた介護支援専門員から情報を聞いたりすることも多くなっている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	認知の為、意向の把握が難しい時は、生活歴や職歴、本人の性格などを考慮しつつ、本人の心地良い状態や環境という視点で検討している。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	本人の生き方や大切にしてきたものを家族から聞く事で、本人の思いを推察している。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	△	記録はとっているが、ほぼ生活の記録となっており「暮らし方への思い」という面では具体性に欠けている。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	本人の表情や言葉から気持ちを推察し、どうしたいのか伺いながら対応するよう気を付けている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入居時のアセスメントでおおよそ把握している。家族と話しをしている時に、若い頃の様子やこんなお母さんだったなど思わぬ情報が聞ける事がある。			◎	入居時に、事業所では独自の「トータルケア・アセスメントシート」を活用して、利用者や家族から生活歴のほか、健康状態や基本動作などの情報を聞き、記載して把握している。また、日々の生活の中で利用者から新たな情報を聞いたり、面会時等に家族から得たりした場合には、日々の介護日誌の送りノート等に記録を残している。さらに、介護計画の更新時には、新たなアセスメントシートに更新することができている。加えて、複合施設の3階にある有料老人ホームから、入所につながった利用者もおり、スムーズな情報共有ができる場合もある。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	聞き取りから分かった、今までの生活の様子や職歴などから得意な事、好きなことなどを把握している。実際に行動してみて、現状を把握するよう努力している。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	毎日の様子を観察することで、現在の不安要素やパターンはほぼ把握できている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	○	毎日の様子観察やカンファレンスでどういった時に不安になるのか入居者ごとに把握できており、予測ができる。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	毎日の様子観察やカンファレンスで生活のリズムは入居者ごとに把握できており、おおよその見通しが立っている。				
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	毎月のユニット会やカンファレンス以外にもその都度、話し合い検討している。家族も何かあれば知らせてくれる。困難事例カンファにて、アドバイスをもらった際は、内容を職員に周知している。			◎	月1回ユニット会を実施するほか、必要に応じて、その日の出勤職員で話し合いをしている。また、ユニット会でカンファレンスを実施するほか、外部の高齢者ケア研究会の協力を得て、複合施設等と一緒に困難事例カンファレンスも開催し、アドバイスを求めることができている。さらに、現在のコロナ禍において、家族や外部関係者の担当者会議等への参加はできていないものの、利用者一人ひとりの課題のほか、必要時には家族の意見ももらい職員間で話し合うなど、利用者本位の視点で検討している。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	スタッフ同士で気づいたことがあれば情報交換しており、ユニット会やカンファレンスで更に検討を重ねている。必要であれば家族にも相談している。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	ユニット会やカンファレンスで検討した結果、課題となる事柄を導き出している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	日常会話を通して思いや意向を話し合っているが、具体的内容はなかなか引き出せていない。出来る範囲で、本人の気持ちに沿えるよう努力している。	/	/	/	介護計画は、可能な範囲で利用者や家族の思いや意向を反映するほか、職員の意見やアイデア、関係者の意見を取り入れ、計画作成担当者が作成している。利用者の高齢化等に伴い、担当職員を中心に思いなどを聞いているものの、「これで十分、満足している」などの意見に留まることが多い。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	スタッフ間では常に情報を共有して、アイデアを出し合いながらケアに臨んでいる。コロナの流行で現在は実施できていないが、本人・家族からの聞き取りを行い、個別の外出を計画している。	○	/	○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度の利用者の体調面を考慮しながら、本人が今まで楽しんでた活動は少しでも継続できるよう考慮している。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	家族の協力については難しい家庭もあるが、協力が可能な家族に対しては面会や受診を通して協力をお願いしている。地域との協力体制は現状難しく計画の中には盛り込めていない。	/	/	/	
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	カンファレンス等で情報共有しており、内容についても確認している。ケアプランをファイルして共有している。	/	/	○	前回の外部評価から、利用者全員分の介護計画をまとめたケアプラン綴りを作成し、スタッフの控室に置き、職員がいつでも確認できるようにしている。また、1枚の「総合記録シート(介護・看護・リハ・栄養)」に1週間分の利用者の個別記録を記載することができ、変化したことを記録に残すほか、サービス内容を貼り付けて、サービスの実施の有無を○×で分かりやすく記載するように変更している。さらに、利用者の発した言葉は個別の「総合記録シート」や介護日誌等に記録を残すことができています。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	状況確認については、特に変わった事があれば記録に残すが、口頭で伝聞することも多い。早出者がケアプランが実践できたか○×でチェックしている。介護計画を実践する上で難しかったり、変更が必要であればその都度、話し合っている。	/	/	◎	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	体調や普段と違う様子を中心に記録に残している。支援実施の際、いつもと違う様子や残しておくよと思う事については記録に残すようにしている。	/	/	○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	支援経過の中に書いている。その都度話し合い、実施してみてそれが有効であれば実施するようにしている。個別の記録と連絡ノートに変わりがあれば記録に残している。	/	/	○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	通常は3か月毎に見直しを行っている。入院など特別に状態に変わりがあれば3か月以内であっても見直しを実施している。	/	/	◎	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。毎月実施するユニット会の中でカンファレンスを実施し、3か月に1回ケアプランの更新時にはモニタリングで利用者の現状を確認するとともに、「トータルケア・アセスメントシート」の情報を更新し、新たな介護計画の作成につなげている。また、退院時のほか、心身状態の大きな変化が見られた場合には、利用者の現状に応じた介護計画に見直しをしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	毎月のユニット会でカンファレンスを行い、現状確認や問題提起、ケアの変更等話し合っている。	/	/	○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	実施している。心身の状態に大きな変化があった場合には見直しを行っている。	/	/	◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	問題が起きた時にはその都度スタッフ間で話し合いを行い、ケアの方向性や方法を検討している。時差勤務の為、ユニット会以外での会議は難しい。	/	/	◎	月1回ユニット会(1番地:毎月第3月曜、2番地:毎月20日を基本)を実施し、職員間で話し合いをしている。職員から意見やアイデアを出しやすい環境があり、「むせの強い利用者の対応、離床の変更」などの多くの意見が出されている。夜間の対応など、ユニット会の後に再度復習することもある。また、年度替わりには、合同ユニット会議を開催するほか、複合施設全体で、年4~5回全ての職員が参加した職員会議を実施している。必要に応じて、その日の出勤職員で話し合いをしている。さらに、ユニット会などに参加できなかった職員には、口頭で申し送りをするほか、後日会議録を確認してもらい、押印をしている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	◎	スタッフ同士で些細な事でも気軽に話し合える雰囲気を作っている。お互いの意見を尊重し、相手の話を聞くこととする姿勢を持つようになっている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	◎	ユニット会は毎月第3月曜日と決めて実施している。業務や行事の都合で開催が難しいと思われる時は、その都度日程調整を行い周知している。	/	/	/	
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	◎	申し送りとして口頭で伝える他、会議録の記録を読んで内容を確認してもらっている。	/	/	○	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	日誌の他、ユニットごとの連絡ノートを使って情報を共有している。	/	/	◎	事業所では、毎朝合同の朝礼を実施し、申し送りをしている。また、その日の早出職員が、日勤や遅出等の職員の出勤時に、朝礼での申し送りの伝達をしている。さらに、事業所では、日々の介護日誌(申送りシート・朝礼シート)やユニット毎の連絡ノートに記録を残すとともに、出勤時等に職員は確認し、押印等をして確実な申し送りにつなげている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	職員が出動した際に、早出がその日の申し送りを行う。また大切な内容は日誌や記録シートに記録し、翌日以降の出動者も内容が把握できるようにしている。	◎	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
(2) 日々の支援										
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	入居者の重度化に伴い自身で「したい事」を決めるのは難しい状況となっている。逆に毎日のルーティーンを実施する事で落ち着いて生活出来ている入居者が多くなっている。				入浴前の衣類の準備や飲み物、ぬり絵や歌のレクリエーションなど、職員は選択肢を絞って二者択一などで利用者に関わり、自己決定してもらえよう努めている。利用者からはゆっくりと話を聞き、「わからん、どっちでもええ」と言われることもあるが、利用者の思いなどをくみ取るようにしている。また、利用者や接する場合には、職員は明るい表情や声かけを心がけて接しているほか、好きなレクリエーション時や人混みを避けた花きセンターへのドライブ時などに、利用者の生き生きとした表情が見られるよう支援している。	
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	△	機会があれば二者択一できるような問いかけをしているが、認知症の為選ぶ事自体が難しくなっている。問いに対して「わからん」「どっちでもええ」と答える事が多い。			○		
		c	利用者が思いや希望を表現するように働きかけたり、わかるかに合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	△	ゆっくりと傾聴して本人の思いを理解するよう努力している。職員主導であっても、本人が納得できるように働きかけたり、拒否が見られる時には無理強いをしないようにしている。					
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	起床や食事の時間など、ある程度決まった時間はあるが、その時々状態に合わせて対応している。特に重度化の進んだ入居者には、本人の生活のペースやリズムに配慮し気分よく生活できるように配慮している。					
		e	利用者の活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	入居者に接するときは明るい表情と声を掛けている。また一人ひとりの性格や好みを把握し、どう接すれば喜んでくれるかを踏まえて対応している。					○
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるように支援している。	○	本人の表情や言葉から気持ちを推察し、どうしたいのか伺いながら対応するよう気を付けている。また、生活のパターンからおおよその検討をつけ、トイレに誘導したり、間食を準備するなど不安や不快な状態を長引かせない努力をしている。					
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	拘束虐待委員会の活動を通して人権や尊厳についての意識を高める努力をしている。入居者の方々に対しては、共生の意識をもって、自尊心を大切にしたい対応を心がけている。		○	○	複合施設として、3か月に1回拘束虐待防止委員会を実施して話し合うほか、年2回人権や尊厳等をテーマに取り上げた研修を実施し、職員は学んで理解している。日中に1人以上の職員がリビングで見守りしているものの、2人体制でのトイレ介助などに職員が追われ、歩行できない利用者が立ち上がる時につい大きな声を出してしまったり、利用者や仲良くなりすぎて、馴れ馴れしい言葉づかいをしてしまう場面も見られ、ユニット会等で話し合いをしている。また、居室への入室時には、事前に利用者へ用事を伝え、ノックをして入室をすることができている。	
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	普段から、そのように心掛けている。			○		
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	◎	入浴は個浴なのでゆっくりと関わりながら行っている。トイレは居室についており、安心して使用して頂いている。					◎
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	居室に入る際は、どういった用事で入るのか説明している。また、本人が在室の際は、ノックをして声をかけてから入室している。					
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	法令順守の勉強会を実施しており理解している。					
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	出来る事、得意な事を生かせる場を作るようにしているが、不十分。お互いに「ありがとう」という言葉が日常的によく聞かれている。タオルを干す量も手伝いをお願いしている。				洗濯物干しやたみ、ゴミ箱折りなど、できることを手伝ってもらった場合には、相互に「ありがとう」など感謝の言葉を伝えている。利用者の高齢化に伴い、利用者自身ができることは少なくなってきたものの、洗濯物をたたむ場面や、洗濯ばさみを取ったり、ハンガーからはずしてもらったりする役割を担ってもらったりなど、些細なことでも家事など利用者同士が協力し合うことができるよう支援している。また、認知症の進行から、不穏や居室を間違えることもあり、他の利用者が叱責しトラブルになりそうな場面も見られるが、職員が間に入り早めの対応をしている。	
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らすことの大切さを理解している。	○	理解できている。そうなれるよう、努力しているが、認知症の進行の為、他者との関係づくりが難しくなっている現状もある。					
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	おのおの性格や生活歴を把握して、主導権を渡しつつもトラブルにならないよう声掛けをしたり、距離感を調節したりしている。					○
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者には不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	善悪ではなく、可能なら相手の気持ちや状態を伝え理解を求め、難しいようなら、しばらく物理的に距離を置くなどして気持ちや状態が収まるのを待つ等ケースバイケースで対応する。					

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	入所時の聞き取りで確認しているが、細かいところまでは十分分かっていない。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	現在関りのない関係や場所については知らないことが多い。個別の外出計画の中で、家族にも聞き取りをおこなっている。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	面会に来られる方との交流はあるが、ホームから出向くことは少ない。個別の外出計画が、支援のきっかけに繋がればと思う。地域の盆踊りや地域のサロンに参加したこともある。コロナの流行で現在は実施できていない。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	居室でゆっくり過ごして頂けるよう案内している。また、いつでも来てください、と伝えて歓迎の意を表している。現在はコロナの為、タブレットやスマートフォンにて面会を実施している。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	コロナの為、行事や個別の外出などは現在実施できていないが、個別で近所の散歩を実施したり、鯉のエサやりや畑やテラスでのプランター栽培の成長を見て楽しんだり、収穫するなどしている。	○	○	○	現在のコロナ禍においても、事業所のベランダや近隣の神社まで散歩をしたり、ドライブをしたりするなど、利用者が気分転換や楽しみが持てるよう支援している。また、敷地内にある畑に出かけて、サツマイモなどの成長を見守ったり、ベランダでゴーヤやきゅうりの栽培のお世話をしたりすることもある。重度な利用者も、中庭のウッドデッキやベランダに出て、外気浴をしたり、桜が咲いた花見の時期には車いす等で近隣の川沿いに出かけて、写真を撮ったりするなどの支援もできている。また、コロナ禍以前の誕生日には、利用者の好きな所に出かけられるよう支援しており、美術館や砥部焼の絵付けなどに出かけたりするなど、利用者や家族から喜ばれていた。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	盆踊りなど地域の行事に参加する際、協力を得ている。コロナの流行で現在は実施できていない。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	○	車椅子で近所を散歩したりテラスに出て外気に触れる等している。				
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	○	ご家族の対応で外出している。今年はコロナで自粛しているが、例年松山の盆踊りや三津への魚釣り、母体であるガリラヤ荘への行事参加など実施している。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	認知症の勉強会へ参加し知識の向上に努めている。日々の観察から、周辺症状が現れた時には、話し合いながら原因を究明し、安心して生活できるように取り組んでいる。また、困難事例カンファにて検討し、内容を周知している。				毎朝の体操や立ち上がり時のキープ、リビングに行くまで歩行器を使用した歩行訓練など、生活リハビリを取り入れながら、職員は少しでも利用者の心身機能の維持が図れるよう努めている。また、できることやできそうなことは、職員は見守りや待つ介護を心がけ、更衣時や食事の時には利用者自身にしてみせ、できた場合には「上手にできたね」などの声をかけ、利用者自身ができた満足感が得られるよう努めている。中には、更衣やくつを履くことを自身でできるもの、利用者自身が待てない利用者もおり、つい職員が手を出してしまう場面も見られる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	生活リハビリや体操、散歩等を行い、今の機能が維持できるよう取り組んでいる。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	△	出来るだけ自身で出来るよう、声掛け、見守りを行っているが、つい手を出してしまう場面が多い。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	個性や能力を踏まえて、役割をお願いしている。				以前は、洗濯物たたみやトレイ拭きなどの手伝いは、利用者の取り合いになるような場面も見られたが、利用者の高齢化に伴い、できる役割や出番は減ってきている。洗濯物たたみの時には、洗濯ばさみ取りやハンガー外しなどの出番を作ったり、季節のちぎり絵の作成時には、折り紙切りや貼り付けなどの役割を担ってもらったりしている。また、エレクーンの好きな利用者には、弾いてもらい一緒に歌を歌ったり、編み物の得意な利用者には、生地でカレンダーを作ってもらったりするなど、楽しみごとが持てるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	どの方も、何かしら得意な事や出来る事があり、他者からも認知されるよう声掛けや感謝の意を表現するようにしている。	○	○	○	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	△	お祭りや盆踊りなど、地域の行事に参加させていただいている。コロナの流行で現在は実施できていない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つと捉え、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	△	家族が本人の好みに合うであろう衣類や小物を準備されているので、それを踏まえて理解している。				以前は、自分で髭剃りをして、職員が仕上げなどを手伝うこともあったが、利用者の高齢化に伴いできなくなり、職員が介助している。服を自分で選んで着ることもできていた利用者もいたが、多くの利用者が介助が必要になってきている。また、汚れや食べこぼしが見られた場合には、居室に移動してもらい着替えの支援もしている。また、着替え時の乱れなどが見られた場合には、職員はさりげないフォローをしている。さらに、重度の利用者にも、利用者に似合う服やその人らしい服装を用意したり、訪問理容で髪を整えたりする支援もしている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	自宅ですべてのものを持ってきており、本人の好みのもと思われる。こだわりのある方には、その都度対応している				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	一緒に相談しながら行っている。決められない場合は二者択一など、決めやすいよう対応しているが認知症の進行の為それも難しい場合もある。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	支援している				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	汚れがあれば、自室で新しいものと交換している。不都合なことは、他の入居者が気が付かないよう、そっとう対応している。		○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるよう努めている。	○	希望があれば対応している。現在は訪問理容を利用している。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	訪問理容を利用して髪型を整えたり、本人に似あう服を準備するなどして対応している。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	おおよそ理解している。				外部の委託業者がカロリー等を計算した献立を立て、複合施設の調理室を活用して調理をしている。各ユニットで炊飯を行い、お皿などに小分けにされた食材等が届けられ、配膳をしている。利用者の高齢化等に伴い、「魚嫌い、肉嫌い」などの意見は聞かれるものの、現在好みのメニューまでいわれる利用者はいない。毎月、複合施設として給食委員会を開催し、外部業者等に意見を伝えることができています。利用者と一緒に食器洗いやトレイ拭きをしているが、高齢化等に伴い、できる利用者は少なくなっている。コップや湯呑みは、利用者が用意した物を使用しているが、食器は複合施設の物を使用している。苦手な食材がある場合は、代替品を準備したり、利用者の食事形態に応じて、普通食やソフト食、やわらか食の対応もしている。現在のコロナ禍において、利用者と一緒にテーブルを囲み、食事を摂ることはできていないが、職員は利用者に声かけをしなが、見守りや介助をしている。また、事業所内でカレー作りやおやつ作りを利用者と一緒にすることもあったが、コロナ禍の感染対策で現在は実施できていない。さらに、利用者に楽しみが持てるよう、お花見弁当や祝い膳、忘年会時の寄せ鍋、季節に応じて焼き芋やそうめんなどを取り入れたり、事業所内で干し柿づくりや餅つき、すいか割などのレクリエーション行事を実施したりするなど、利用者が楽しめるような工夫もしている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	施設で作った食事を提供しているが、おやつや食事イベントなどで一緒に準備・調理をしている。コロナの流行で現在は実施できていない。			△	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	x	以前はおやつやカレー作りを一緒に行っていたが、コロナの流行以降は実施できていない。また、認知症の進行、重度の入居者が増えた事も実施できない要因の一つとなっている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	おおよそ把握している。苦手なものは替わりのものを提供している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	毎月の誕生日の祝い膳として、ちらしずしが出たり、季節ごとの行事食が提供されている。流しうめん、芋炊き、鍋などできる範囲で季節を感じ取れる取り組みを行っている。ユニットで出来る範囲でおやつは果物やいも、和菓子など季節感のあるものを提供している。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	施設として対応している。普通食、柔らか食、ソフト食があり入居者の嚥下状態や体調に合わせて提供している。低栄養の方にはエンジョイゼリーなどの補助食が提供される。盛り付けもメニューによって工夫してもらっている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	△	湯飲みコップは個人の物を使用している。他は厨房がある為施設の物を使用している。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	△	介助の入居者が増えた事、食事中の見守り、食後の対応などが必要なため一緒に食事をするのは難しい状況となっている。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	コロナの流行の為現在は自粛しているが、流行前はカレー作りやおやつ作りを通して実施していた。		◎	○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	施設食の為、栄養士が管理している。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	水分が進まない入居者には施設で作るゼリーで代替したり、栄養状態に合わせて、個別で補食を提供するなどして対応している。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	献立や調理については栄養士が管理しているが、毎月給食委員会を開催しており、栄養士と職員が食事について話し合う場を設けている。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	運食の場合は冷蔵庫で保管後、2時間を限度とする、毎週冷蔵庫の掃除、消毒をするなどルールを決めて衛生管理を実施している。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	勉強会等に参加し理解している。				利用者は、起床時と毎食後に口腔ケアをしている。各居室に洗面台があり、自室で歯磨き等をしている利用者もいるが、手狭になることもあり、共用空間の洗面所で口腔ケアをしている利用者も多い。介助や磨き残しの仕上げをしている利用者の口腔ケアの様子は確認できているものの、自身で歯磨きをしている利用者の口腔内の様子までは確認できていないため、定期的に全ての利用者の口腔内の状況を把握することを期待したい。また、重度化で、うがいができない利用者には、リステインを使用し、スポンジブラシで拭き取り、清潔保持に努めている利用者もいる。さらに、昼食前には、口腔ケア体操を取り入れている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	仕上げ磨きの時に確認するよう気を付けているが、隅々まで把握するのは難しい状態である。臭いや出血などがあれば特に注意して、必要であれば訪問歯科を利用している。			△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	研修や勉強会等で学んでいる。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	毎日1回の消毒、毎食後の洗浄を支援している。難しい入居者については、夜間義歯を預かり管理している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	◎	起床時、毎食後の歯磨きを励行している。うがいが多い入居者にはリステインを使用し、スポンジブラシでふき取るようにしている。義歯の自己管理の難しい方は夜間、義歯を預かり入れ歯洗浄剤につけている。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医を受診するなどの対応を行っている。	◎	異常が見つかった時には、歯科に往診を依頼している。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	施設内の勉強会や外部研修に参加し、理解を深める努力をしている。				高齢化等に伴い、ほとんどの利用者は日中も紙パンツやパッドなどの排泄用品を使用して過ごしている。排泄用品の使用時には、職員間で話し合い、家族等に確認をして使用している。また、ファイバーやオリーブオイル、水分摂取、運動、腹部マッサージなどの便秘対策をしているが、半数ぐらいの利用者は医師と相談し、下剤などを服薬している。さらに、「総合記録シート」に排泄状況等を記録を残して排泄パターンを把握し、声かけやトイレ誘導をしている。各居室にはトイレが設置されているものの、退院時の立ち上がりからすぐに排泄ができるよう、ポータブルトイレを使用することもある。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	◎	理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	記録に残すことで把握できている。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	日中と夜間を使い分けたり、体調によって変更するなどしている。	◎		○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	トイレの場所が分からない等、認知の為支障となっていることがあれば、表情や様子をみて誘導するなどしている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	◎	食事や散歩の前など、本人のタイミングに合わせて声掛け誘導を実施している。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	状態に合わせて職員が家族や本人に提案し了解を得ている。使用済みパッドの扱いなどから、衛生面を考慮し、職員主導で選定する場合もある。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	◎	実施している				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	◎	ファイバーやオリーブオイルの飲用、水分摂取、運動、腹部マッサージなど実施している。入院後オムツだった方も、ポータブルトイレでの排泄に移行している。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるように支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	○	おおよそは決まっているが、希望があれば応じている。	◎		○	週2回、午前中に利用者は入浴することができる。利用者の希望に応じて、湯加減や入浴時間、同性介助の対応もしている。また、利用者の状態に応じて、リフト浴を使用しているほか、複合施設の2階にある特殊浴槽を使用して、安心安全な入浴を支援している。脱衣場には床暖房なども設置され、利用者は急激な温度差を感じることなく、入浴をすることができる。また、入浴を拒む利用者には、時間や日にちを変えたり、声かけなどに工夫をしたりしながら、入浴してもらうことができている。さらに、入浴時には、ゆっくりとお話をしたり、ゆず湯などを取り入れたりと、利用者が楽しむことができるよう支援している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	○	湯かけんや入浴時間など本人に合わせて実施している。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	洗体、洗髪、浴槽へのまきなど、出来る範囲で自身で行ってもらっている。特浴や機械浴も活用している。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	本人が納得できるような言葉がけをして誘っている。拒否が強い場合は、時間をずらしたり、目をかえたりしている。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴前にバイタルを測定している。入浴後はバイタルは測定していないが、目視で体調に変化が無いか確認している。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	睡眠時間や様子を記録に残しており把握できている。				認知症に進行から、昼夜逆転や夜に眠れていない利用者もあり、夜間にテレビを見てもらったり、飲み物を飲んでもらったり、職員が見守りをすることもある。日中の利用者の散歩やレクリエーションなどの活動量を増やすなどの生活リズムを整えながら、夜間に利用者が安眠できるよう努めている。また、体調面を考え、看護師や医師と相談しながら、服薬をしている利用者もいる。さらに、居室内に体感のセンサーを取り付け、利用者の転倒や移動などを把握に努めている利用者もいる。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	散歩やレク活動で日中の覚醒を促している。眠くなるまで時間がかかる方や中途覚醒して眠れない方は眠くなるまでテレビを見て過ごすなどしてもらおう。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	日中は散歩したり、簡単な作業をするなどで退屈しないよう取り組んでいる。不眠が続く方については看護師に普段の様子を報告し、主治医と相談しながら薬の調整を行っている。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	実施している。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	△	認知症の為、自ら手紙や電話のやり取りは難しくなっている。友人から手紙が来たり、家族の希望でテレビ電話の支援を実施している。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	△	面会はテレビ電話で対応している。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	△	可能な限り希望に合わせてテレビ電話の対応をしている。一人でも電話で話せる入居者に対しては、セッティングをしたら自由に話してもらい、時々様子を見るようにしている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	△	届いた手紙や葉書は、一緒に読むなどした後、居室に飾るように置いている。認知症の為に難しい方も多く、返信のアプローチはできていない。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	△	対応できるように準備はしている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解している。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	以前は移動販売での買い物をサポートしていたが、現在は希望がない為、家族の依頼で、職員の代理購入を実施している。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	△	週に2回移動販売が来ており、主に利用している。それ以外は大型スーパーを利用することになり理解や協力をお願いしていない。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	家族の判断でお金の所持はしていない。お金を使う事があれば、施設立て替えて対応している。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	話をして納得してもらっている。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	必要なものがあるときや本人が買い物や外出で現金が必要な時は、家族に連絡し、施設立て替え等の許可をもらっている。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	△	出来る範囲で要望には応じているが、多様なニーズがまだ発生しているという認識がない	◎		○	利用者や家族から出される要望は少なくなっているものの、事業所では可能な範囲で柔軟に対応している。コロナ禍以前は、誕生日に利用者が行きたい場所に行けるよう支援しており、要望に応じて美術館やペットのふれあいコーナーなどに出かけることができていた。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと		
(3)生活環境づくり											
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	複合施設の為、玄関や建物周囲は施設が工夫している。ホームの玄関には季節の物を飾っている。	◎	◎	○	複合施設の1階に事業所はあり、整理された共用の玄関を使用している。玄関に入ってすぐ事務所があり、職員が快く対応や案内をしてくれている。また、事業所には各ユニットに入り口があり、玄関から近く入りやすくなっている。		
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。)	○	木材を使用した、温もりのある環境が整えられている。利用者とともに作成した飾り物を飾り、季節に応じて装飾を工夫している。	○	○	○	事業所の案内には、「のんびりと穏やかに 安心して過ごせる空間づくり」が掲げられ、共用空間は広く、利用者はソファやテーブル、居室など思い思いの場所で過ごすことができている。壁には、利用者が布を活用して作成したカレンダーのほか、塗り絵やちぎり絵の大作が飾られ、季節を感じることもできる。また、以前に台湾からの来訪した実習生と一緒に作成した、風鈴のような飾りが天井から吊るされている。さらに、毎日職員が清掃して清潔保持に努めるとともに、加湿器やオゾン発生装置、床暖房の設備が設置され、快適な空間となっている。加えて、リビングからテラスや中庭にあるウッドデッキに出ることができ、利用者はお茶を楽しんだり、敷地内にある簡易の水路には鯉を飼育され、餌やりが日課になっている利用者もいる。		
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	職員が中心になっているが、毎日日課として掃除をして清潔を保っている。					◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	利用者とともに作成した飾り物を飾り、季節に応じて装飾や季節の花を飾っている。						○
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う入居者同士で過ごしてもらったり、個別のテーブルで好きなレクに取り組みてもらっている。						
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	◎	見えない構造になっている。						
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもので活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	自宅で使っていた家具や装飾品、写真などを持参し利用している。入居後は家族が折に触れ持参された花や写真を部屋に飾っている。	◎			各居室には、トイレや洗面台、エアコン、ベッド、床頭台が設置されている。利用者はタンスやテレビを持ち込んだり、写真や花を飾り、一人ひとりに応じた空間づくりをしている。また、入り口は引き戸で、居室番号や名前が表示されているほか、利用者自身が分かりやすい飾りや暖簾が掛けられている。		
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	木材を使用した、温もりのある環境が整えられている。必要に応じて、ベッドでの立ち上がりのためのL字パーや夜間の動向を把握するためのセンサーなどを設置して、自分でトイレに行く際は安全に配慮して見守りを行っている。				○		
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	リビングの椅子に名前を付けたり、居室の入口に表札や目印をつけたりして、間違えて他者の居室に入らないように工夫をしている。						
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ぼうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	△	本などを手の届く位置に置いている。ぬり絵など、個別の作品を綴ったファイルを作成し、リビングにて保管している。						
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)	○	鍵をかけることの弊害を理解し、日中は鍵をかけていない	◎	◎	○	職員は施設内研修や勉強会で、鍵をかけることの弊害について理解している。複合施設の共用の玄関は日中解放され、来訪者等の出入りはセンサーチャイムで把握することができる。事業所の入り口は2か所あり、日常的には解放されているものの、現在は不穏な利用者があるため、片方の入り口は施錠する場合もある。また、夜間は防犯のため、20時から6時頃まで施錠されている。		
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	家族の理解を得ている。						
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)。	○	ホームの玄関には鍵をせず、建物の玄関(事務所前)に赤外線センサーを設置し、他部署への協力を依頼して対応している。						

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	入所前のアセスメントシートにより、把握するようにしている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	総合記録シートを活用し、記録をこまめにとっており、異常の早期発見につとめている。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	看護師に健康面での相談はいつでもできる。夜間もオンコール体制がきちんとしてれている。週ごとの振り返り(ダブルチェック)を看護師と行い、重度化の防止につとめている。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	かかりつけ医がある場合は、家族の意向等伺い希望する病院への受診を継続している。		◎		
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	かかりつけ医がある場合は、家族の意向等伺い希望する病院への受診を継続している。必要に応じて、入居者の状態を伝える等して関係を築いている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	実施できている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	実施できている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	実施できている。看護師が密に病院側と連絡をとっている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	◎	実施できている。看護師が密に病院側と連絡をとっている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	何でも相談できる関係が築けている。また、看護師の方からも記録を確認し、情報を収集している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	夜間のオンコール体制がきちんとしてれている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	看護師が毎日職員からの聞き取りと、入居者の健康状態を確認しにユニットまで足を運んでおり、体調に異常があった場合は早期発見に努め、主治医へ連絡をしている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	薬の種類等は把握しているが、副作用等については十分理解できていない。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	誤薬を防ぐためのマニュアルを作り、それに沿って服薬介助を行っている。必ず2人でチェックを行い薬袋の確認をしている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	状態に変化や不調の兆しがあれば随時看護師に報告し相談している。必要があれば、主治医に連絡して指示を仰いでいる。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	体調に変化があれば記録に残し、医療に情報提供できている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	実施できている。重度化になった時点で家族・管理者、計画作成担当者、看護師で現時点での体調について、今後たどるであろう経過と家族の以降の確認をとっている。	/	/	/	複合施設・事業所として、「看取り介護に関する指針」があるほか、事業所として、「重度化した場合の対応に係る指針」を整備し、入居時に利用者や家族に説明している。重度化など必要に応じて、家族等に再度説明するとともに、看取り介護を希望する場合には、家族は必ずカンファレンスに参加して医師や看護師を交えた関係者で話し合い、方針を共有して支援をしている。重度化した場合には、医療支援を希望して入院したり、2階にある特別養護老人ホームに転院した利用者もいる。また、複合施設に看護師が配置されているほか、緊急時には主治医と連絡を取れる体制ができています。さらに、事業所では、今までに4名の看取り介護を経験しており、職員には研修を実施するほか、看取り後には振り返りを実施している。看取り介護を支援した家族から感謝され、感謝状を持って来られたこともあり、現在事業所内に掲示している。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	入居者が看取りになった時点でカンファレンスを行い、家族、各専門職で今後の方針を話し合い情報を共有している。	○	/	○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	◎	職員の不安や疑問にはその都度寄り添い思いを共有しつつ、支援の方向性や限界を見極めている。	/	/	/	
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	実施できている。入所時にも説明しているがその都度、家族と話し合いをして理解を得る努力をしている。	/	/	/	
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	実施できている。 看護師が医療の窓口となり、必要に応じて主治医と連携をとっている。	/	/	/	
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	実施できている。 家族には定期的に様子を知らせる等して、心の準備ができるよう、また不安や悲しい気持ちに寄り添うよう配慮している。	/	/	/	
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	研修や定期的な勉強会で、勉強している。	/	/	/	
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	◎	マニュアルが準備されている。対応方法については、時期ごとに再確認をしている。	/	/	/	
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	朝礼や委員会で報告し、周知するようにしている。	/	/	/	
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	流行時には手洗いや手すりやドアノブなどの消毒を強化し、換気にも気を付けている。また感染症が疑われる入居者は居室対応するなどして、蔓延を防いでいる。	/	/	/	
		e	職員は手洗いやうがいなども徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	実施できている。手洗い、うがいに加え出勤の前には検温して体調確認を行っている。面会の家族についても同様で、チェック表の記入、検温を実施してもらっている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	面会時に、利用者と一緒にイベント時や普段の様子などをお話するようにしている。	/	/	/	現在のコロナ禍において、事業所では面会制限を設けているものの、SNSを活用したオンライン面会のほか、ロビーとユニットを隔てた扉越しの面会にも対応している。訪問調査を実施した10月からは県内の警戒レベルも下がり、事業所では徐々に面会の緩和を検討している。また、現在は家族の参加できる行事案内も自粛しているが、事業所には家族会の設置があり、コロナ禍以前は年1回懇談会を実施し、意見交換をすることができていた。さらに、家族の面会時には、職員がお茶を出して歓迎するほか、利用者の様子を職員から伝え、話し合いをしている。加えて、事業所では隔月で、写真を多く掲載した「ほのぼの通信」を送付して、事業所内の様子を伝えたり、必要時には電話連絡をして様子を伝えることができてい
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	実施している。笑顔での対応、世間話、ご本人の様子を伝える、お茶の提供などで歓迎の意を表している。	/	/	/	
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	○	散歩や受診外出などで協力していただいている。個別の外出では、ご家族にも参加の有無を確認している。	○	/	○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	◎	隔月で「ほのぼの通信」を作成し、送付している。年に一度、家族会を行う。面会時には写真なども見ていただきながら、行事等での様子をお伝えしている。希望する家族には、プリントした写真をお渡ししている。	○	/	○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	ご家族の質問や要求があった場合は、報告をするようにしている。不安に感じていることなどを把握できる場合は、それをふまえて報告している。	/	/	/	
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	支援するよう心掛けている。認知症の為分からなくなったこと、出来なくなったこと、本人の家族への思いなど機会があれば伝えるようにしている。	/	/	/	
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	◎	外出行事や、費用の掛かるイベント参加などは、都度ご家族に確認をしている	○	/	○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	○	年に一度、家族会を実施している。コロナの流行で、現在実施できていない	/	/	/	
		i	利用者一人ひとり起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	今後の起こりうるリスクについては、できるだけ事前にお伝えするようにしている。	/	/	/	
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行っている。	○	面会時には入居者と一緒にイベント時や普段の様子などを伝えている。	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	出来るだけわかりやすくお伝えできるようにしている。必要に応じて文書を送っている。	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	希望があれば対応している。	/	/	/	
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	利用料の変更時などは、文書で案内を出し、同意を得るようにしている。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
Ⅲ. 地域との支え合い										
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	◎	設立段階から、説明や理解を図っている。		○		複合施設・事業所として、町内会には加入していないものの、建物内にある地域交流サロンを活用して、地域の高齢者が参加できる地域サロンを開催したり、近隣にある障がい者の共同作業所「なかよし村」から、おかしなどの訪問販売や訪問喫茶を開催したりしてもらうなど、地域との交流が継続できるよう支援している。また、コロナ禍以前は、フラダンスなどの催しのボランティアを受け入れをしたり、民生委員や近隣住民の来訪したり、地域の盆踊り大会に参加するなど、交流をすることができていた。また、パンの訪問販売や移動スーパーの来訪もあり、利用者は楽しみにしている。	
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	○	普段からあいさつなどには気を付け、お祭りや盆踊りなどには利用者と一緒に参加させてもらっているが、今年はコロナの為実施できていない。		×	○		
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	△	なにかあった時には、支援して下さる方もたくさんおられると思う。					
		d	地域の人気が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	○	以前は民生委員、ボランティアの方のほか、地域の方も面会に来てくださっていたが、今年はコロナの為来訪はない。					
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りてもらったりなど、日常的なおつきあいをしている。	△	あいさつ程度のお付き合いとなっている。コロナのこともあり関係性は深まっていない。					
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	○	コロナ流行の為現在は自粛しているが、フラダンスやカラオケ等のイベント訪問に参加させてもらっていた。地域施設(なかよし村、はばたき園など)とも交流しており、バザーなどのお誘いを受けている。					
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	○	近所への散歩、病院の利用など限られている。コロナが終息すれば、個別の外出で、地域資源を活用していきたい。					
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	○	近隣施設のイベント・盆踊りなどに参加させてもらったこともある。外出等で地域のお店にも協力していただいている。なかよし村や訪問喫茶が来られた時は、活用しているが今年はコロナの為実施出来ていない。					
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	利用者の参加はないが、家族や地域の方には参加してもらっていたがコロナの為、書面での開催となっている。	○		○	運営推進会議は、家族や民生委員、地域包括支援センターや社協職員、市担当者等の参加を得て開催している。会議では、利用者の状況や事業所での行事、事故・ヒヤリハット報告などを行い、参加者から一言ずつ意見をもらうことができています。また、会議と一緒にリフトの使用方法やケア方法を学んだり、さつまいもの苗付けやフラワーアレンジメントを取り入れたり、職員と茶話会をして意見交換をするなど、参加者が少しでも参加しやすいよう工夫している。さらに、今年に入ってから現在のコロナ禍において、書面開催となっているものの、参加メンバーには事前にアンケートを送付し、意見や助言をもらうことができています。事業所では、会議の内容を家族に伝えられるよう、会議録の送付などを現在検討している。	
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実績、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告している。	○	自己評価・外部評価の結果を含め、運営推進会議で報告している。			○		
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	参加者全員から最後にひとこといただき、出された意見は日々の取り組みに活かすようにしている。今年はコロナの為、アンケートという形で意見を伺っている。			○		○
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	コロナ流行の為現在は書面を送付しての書類会議となっている。流行前はリフトを使用してのケア方法の説明をしたり、入居者や職員と意見交換の茶話会、芋の苗植え、フラワーアレンジメントを実施している。			○		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	◎	公表している。					

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	理念については、職員会などで重ねて確認するようにしている。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	ご家族には、入所時・家族会などで説明させていただいている。利用者・地域の方には、あまりかまっては話せていない。	○	○		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	基礎介護勉強会等を通じて、内部研修は計画的に実施するようにしている。外部研修も、偏りがないよう配慮しながら、内容に応じて参加している。				法人・事業所として、月1～2回施設内研修や勉強会を実施するほか、年2回リーダーが職員に個別面談を行うなど、職員のスキルアップに努めている。新任職員には、先輩職員等がついて指導をするほか、段階的に面談を実施し、職員育成に努めている。複合施設には施設長がいるほか、代表者も時には事業所に顔を出し、職員に声をかけることができている。また、今年4月に管理者が交代したが計画作成担当者等として以前から勤務しており、現在も職員と一緒に現場の業務に入り、普段から職員に声をかけているほか、気になる職員には相談等にも応じていることをあり、思いや意見を伝える職員も多い。さらに、年1～2回ストレスチェックを実施しているほか、何かあれば、外部の「こころ塾」にいつでも相談できる仕組みづくりもできている。加えて、必要に応じて、職員の勤務形態を変更して働きやすい勤務時間帯にパート職員として働いてもらうなど、事業所は開設5年目を迎えるが、人事異動をした以外に退職した職員はいない。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	経験のある職員が多いが、新人職員にはOJTを通じて、計画的に育成している。開設以来、退職者は一人もいない。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	職場環境・条件の整備はできている。各自の向上心までは持てていないように感じる。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流の機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	グループホーム交流会で、他の施設との交流はあるが、十分ではないと思う。現在コロナの為、会自体が実施できていないが、DVDを配布していただき、ユニット会の中で観ていただくなどしている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	こころ塾の活用などで、ストレス軽減にとりくんでいる。		○	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	◎	毎月の拘束虐待防止委員会、拘束虐待防止勉強会に参加する中で、不適切ケアについて周知している。				複合施設として、毎月拘束虐待防止委員会で話し合うほか、年2回虐待や不適切なケアなどを勉強会を開催し、職員は学んで理解している。急を要する場合には、職員がつい大きな声を出してしまい、利用者をびっくりさせてしまったり、利用者と職員が仲良くなりすぎて、馴れ馴れしい言葉や冗談が不適切に聞こえることもあり、気になる場合はリーダー等に伝え、該当職員に説明や注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	実施できている。毎月、ユニット会を実施してケアについて話し合いをしている他、日頃から気が付いたことを話し合えるような環境を作っている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃されることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	◎	毎月の拘束虐待防止委員会、拘束虐待防止勉強会に参加する中で、周知している。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	実施できている。				
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	毎月の拘束虐待防止委員会、拘束虐待防止勉強会に参加する中で、周知している。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	毎月の拘束虐待防止委員会、拘束虐待防止勉強会に参加する中で、周知している。ユニット会などで、実際の事例を話し合うこともある。				
		c	家族等から拘束や施設長の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	いまのところ、そのような要望はほとんどみられないが、実際に要望があった際には、きちんと対応していきたい。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを理解している。	○	普段の仕事の中では馴染みがうすく、理解するのは難しい。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	いまのところ、相談等はない。実際に相談があった際には、きちんと情報収集を行い、対応していきたい。 6月に入所された方が、入所以前から成年後見人を立てている。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	×	いまのところ、相談等はない。実際に相談があった際には、きちんと情報収集を行い、対応していきたい。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	意識不明等の急変に対してのマニュアルはあり、全体に周知しているが、怪我等個別のマニュアルはない。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	初任者研修で勉強した。消防署職員救命講習(内部研修)にも、交代で職員が参加していく。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	事故報告書・ヒヤリハットとも整備されており、速やかに記入ができています。ただ、内容の閲覧まで、十分な検討まではできていない。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	実施している。センサーマットや緩衝マットなど使用したり、歩行が不安定な方には歩行器を使用する、歩行時は見守り、手引きをするなど実施している。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情対応マニュアルを整備している。 いまのところ苦情はまだでていない。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	△	いまのところ苦情はまだでていないが、実際に苦情が寄せられた場合は、速やかに対応していきたい。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	△	いまのところ苦情はまだでていないが、実際に苦情が寄せられた場合は、速やかに対応していきたい。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	相談窓口は作成しているが、いまのところ苦情はよせられていない			○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞くよう努めているが、高齢化等に伴い意見を言われる利用者は少なくなってきている。家族からは、面会時や電話連絡時を活用して、意見を聞いている。また、管理者は普段の業務の中で職員に声をかけるほか、気になる職員には相談等にも応じており、職員からよく意見が出されている。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	相談窓口は作成しているが、いまのところ苦情はよせられていない	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	△	契約当初だけが情報提供できていない				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	機会を作るようにしている				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	現場に入り、実際のケアにあたりながら、職員とも意見交換や指導を行っている			◎	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	自己評価は数人の職員で行った。実施後の振り返りは全員に周知していきたい				外部評価の自己評価は、各ユニット毎に数名の職員でリーダーを中心に作成している。自己評価の作成は、業務の振り返りや新たな気づきが得られることも考えられるため、可能な項目を絞り込むなど、職員全員の意見を取り入れながら作成できることを期待したい。また、運営推進会議の中で、自己評価とサービスの評価結果は報告し、意見をもらっている。さらに、今回の外部評価のサービスの評価結果後には、職員に報告し、振り返りを予定している。コロナ禍以前は、家族や会議の参加メンバーに取組み状況などの確認をしてもらうことができていたが、面会制限もあり現在はできていない。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	○	前回の評価で明らかになった課題については、全体に報告し、また新しい取り組みの実施状況についても報告している。				
		c	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	目標達成計画を作成し、実際に取り組んでいる。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	家族会や運営推進会議で報告し、実際に取り組んでいる。今年度は、コロナ流行の為、家族会を実施できていない。	△	○	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	家族会や運営推進会議で報告し、実際に取り組んでいる。今年度は、コロナ流行の為、家族会を実施できていない。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	火災時の対応マニュアルは作成している。そのマニュアルに準じて、他の災害時にも行動できるように伝えていきたい。火災・地震の防災訓練を実施した。				複合施設が合同で、消防署の協力を得て、年2回火災や地震などを想定した避難訓練を実施している。事業所では、消防計画や防災計画など、対応マニュアルを作成している。また、複合施設では市行政から福祉避難所の指定を受け、水や食料、感染対策グッズなどの備蓄品を用意している。さらに、地域の防災訓練に参加協力することもできている。家族アンケートの結果から、災害の備えに対して理解が十分に得られていないことが窺えるため、「ほのぼの通信」を活用して訓練の様子を報告したり、コロナ禍の終息後の家族会等で話し合う機会を設けたりするなど、理解が得られることを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	火災・地震の避難訓練を行っている。また夜間の通報訓練などを通して、行動マニュアルを周知するようにしている				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	ガリラヤ久米全体で、物品の用意・点検を行っている				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	避難訓練で、消防署の協力を得て、指導等いただいているが、地域住民や他の事業所との訓練や話し合いはできていない	x	○	△	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	△	同上。合同訓練に参加した。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	x	グループホーム単体での情報発信や啓発活動はできていない				事業所に直接相談が寄せられることは少ないものの、複合施設の居宅介護支援事業所等で、地域住民の相談に応じることはできている。コロナ禍以前は、複合施設の地域交流サロンの部屋を活用して、地域の高齢者等も参加できる地域サロンを開催することができていた。また、事業所への入所希望の見学や相談には、対応することができている。さらに、大学生の実習や中学生の職場体験の受け入れに協力したり、小野・久米地区グループホーム連絡会に参画し、意見交換したりすることができている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	居宅支援事業所で支援を行っている。グループホームでは、入所希望者の見学や相談支援を行っている		○	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	○	グループホームとしては場所の提供等できていないが、地域サロンを活用していただいている				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	東温市のガリラヤ荘と連携して、学生等の実習受け入れに協力している。中学生の職場体験にも協力した。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	○	グループホーム交流会で、他の施設との交流はあるが、十分ではないと思う。なかよし村の訪問販売などに参加させていただいている。地域の盆踊りや、お祭りの訪問に参加し楽しませていただいている。今年度はコロナの為参加できていない			○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 3 年 10 月 4 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 16名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	4名	

※事業所記入

事業所番号	3890101516
事業所名 (ユニット名)	グループホーム ガリラヤ久米 西通り1丁目2番地
記入者(管理者) 氏名	上田 稔
自己評価作成日	令和 3年 9月 1日

<p>【事業所理念】 『今、ここで生きている人に寄り添うことを使命とする』</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ①介護計画について、職員それぞれが把握できていない。ケアプランの実施チェックと関連した記録が残っていない。 ・介護計画について、最新のものを職員がすぐ手にとれる場所にファイリングし、閲覧しやすいようにしている。 ・記録シートの備考欄に、ケアプランに関連した記録が残るように周知している。 ②運営推進会議や避難訓練をきちんと実施しているが、運営推進会議に参加していない家族や地域の方に内容が周知できていない。 ・運営推進会議の報告を同封予定であったが、どのように周知するか検討中。 ・避難訓練の写真、ほのぼの通信に掲載し、全ての家族に様子を確認していただく予定であったが、コロナウイルス感染症の為、利用者が不参加の為、写真が撮れていない。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所は市中心部から少し離れた郊外にあり、小規模特別養護老人ホームやデイサービスなどの3階建ての複合施設の1階にある。建物内は広く、事業所の案内には、「のんびりと穏やかに 安心して過ごせる空間づくり」が掲げられ、高齢化や認知症の進行等に伴い、利用者自身ができることは減ってきているものの、可能な範囲で利用者や家族の要望に応じながら、柔軟な対応をしている。現在のコロナ禍において、外出制限や面会制限が設けられているものの、近隣にある神社まで散歩したり、人混みを避けてドライブに出かけたりするなど、利用者は気分転換ができています。また、SNSを活用したオンライン面会や扉越しでの面会に対応したりするほか、今後はマスク着用で仕切り版を設置した面会ができることを検討している。コロナ禍以前には、誕生日に利用者が行きたいところに行けるよう支援しており、美術館や砥部焼の絵付け、ペットとのふれあいコーナーに出かけるなど、利用者や家族に喜ばれている。さらに、お花見弁当や祝い膳、忘年会時の寄せ鍋、季節に応じて焼き芋やそうめんなどを取り入れたり、干し柿づくりや餅つき、すいか割など行事やレクリエーションを実施したりするなど、利用者が楽しめるような支援もしている。加えて、法人・事業所として、働きやすい勤務形態に対応するなど、働きやすい職場環境づくりに努め、人事異動はあるものの事業所の開設以来、退職者は一人も出ていない。</p>
---	--	--

評価結果表

項目No.	評価項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える								
(1)ケアマネジメント								
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	<p>a 利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。</p> <p>b 把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。</p> <p>c 職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。</p> <p>d 本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。</p> <p>e 職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>△</p> <p>○</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>日々の生活の中で、職員は利用者から思いや意向を聞き取るよう努めている。利用者の高齢化や認知症の進行等に伴い、把握することが難しい利用者には、生活の様子を観察しながら思いを汲み取ったり、家族や以前利用していた介護支援専門員から情報を聞いたりすることも多くなっている。</p>
2	これまでの暮らしや現状の把握	<p>a 利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。</p> <p>b 利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。</p> <p>c 本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。</p> <p>d 不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)</p> <p>e 利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>入居時に、事業所では独自の「トータルケア・アセスメントシート」を活用して、利用者や家族から生活歴のほか、健康状態や基本動作などの情報を聞き、記載して把握している。また、日々の生活の中で利用者から新たな情報を聞いたり、面会時等に家族から得たりした場合には、日々の介護日誌の送りノート等に記録を残している。さらに、介護計画の更新時には、新たなアセスメントシートに更新することができている。加えて、複合施設の3階にある有料老人ホームから、入所につながった利用者もおり、スムーズな情報共有ができる場合もある。</p>
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	<p>a 把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。</p> <p>b 本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。</p> <p>c 検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>月1回ユニット会を実施するほか、必要に応じて、その日の出勤職員で話し合いをしている。また、ユニット会でカンファレンスを実施するほか、外部の高齢者ケア研究会の協力を得て、複合施設等と一緒に困難事例カンファレンスも開催し、アドバイスをすることができている。さらに、現在のコロナ禍において、家族や外部関係者の担当者会議等への参加はできていないものの、利用者一人ひとりの課題のほか、必要時には家族の意見ももらい職員間で話し合うなど、利用者本位の視点で検討している。</p>

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	本人の生活スタイルやリズム、希望を考慮して介護計画を作成している。また、家族の意向にも、可能な限り対応するようにしている。	/	/	/	介護計画は、可能な範囲で利用者や家族の思いや意向を反映するほか、職員の意見やアイデア、関係者の意見を取り入れ、計画作成担当者が作成している。利用者の高齢化等に伴い、担当職員を中心に思いなどを聞いているものの、「これで十分、満足している」などの意見に留まることが多い。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	面会に来られた時に、生活の様子や本人の言葉等を伝えて家族からも提案や協力を得るようにしている。入居者には理解度や性格等に配慮しながら話している。スタッフ間ではノートや口頭で情報を共有し合いながらそれぞれの意見やアイデアを出し合っている。	○	/	/	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	入居者のペースに合わせたケアを心掛けている。看取りの為臥床して過ごす事が多い方には、好きな音楽やラジオなどを聴いていただいている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	家族の協力については難しい家庭もあるが、協力が可能な家族に対しては面会や受診を通して協力をお願いしている。地域との協力体制は現状難しく計画の中には盛り込めていない。	/	/	/	
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	カンファレンス等で情報共有しており、内容についても確認している。ケアプランをファイルして共有している。	/	/	○	前回の外部評価から、利用者全員分の介護計画をまとめたケアプラン綴りを作成し、スタッフの控室に置き、職員がいつでも確認できるようにしている。また、1枚の「総合記録シート(介護・看護・リハ・栄養)」に1週間分の利用者の個別記録を記載することができ、変化したことを記録に残すほか、サービス内容を貼り付けて、サービスの実施の有無を○×で分かりやすく記載するように変更している。さらに、利用者の発した言葉は個別の「総合記録シート」や介護日誌等に記録を残すことができています。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	◎	別紙にて○×で実施の記録を残す様にしている。状況確認については、特に変わった事があれば記録に残すようにしている。口頭で伝聞する事もある。	/	/	◎	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	体調や普段と違う様子を中心に記録に残している。支援実施の際、いつもと違う様子や残しておくと思う事については記録に残すようにしている。	/	/	○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	支援経過の中に書いている。その都度話し合い、実施してみてもそれが有効であれば実施するようにしている。個別の記録と連絡ノートに変わりがあれば記録に残している。	/	/	○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	通常は3か月毎に見直しを行っている。入院など特別に状態が変わりがあれば3か月以内であっても見直しを実施している。	/	/	◎	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。毎月実施するユニット会の中でカンファレンスを実施し、3か月に1回ケアプランの更新時にはモニタリングで利用者の現状を確認するとともに、「トータルケア・アセスメントシート」の情報を更新し、新たな介護計画の作成につなげている。また、退院時のほか、心身状態の大きな変化が見られた場合には、利用者の現状に応じた介護計画に見直しをしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	毎月のユニット会やカンファレンス以外にもその都度、話し合いの機会を持ち現状を確認している。	/	/	○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	退院後、また心身の状態に大きな変化があった場合には見直しを行っている。必要に応じてカンファレンスを開催しており、現状にあったケアプランを作成している。	/	/	◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	問題が起きた時にはその都度スタッフ間で話し合いを行い、ケアの方向性や方法を検討している。それぞれが意見を出し合い解決方法を導きだしている。	/	/	◎	月1回ユニット会(1番地:毎月第3月曜、2番地:毎月20日を基本)を実施し、職員間で話し合いをしている。職員から意見やアイデアを出しやすい環境があり、「むせの強い利用者の対応、離床の変更」などの多くの意見が出されている。夜間の対応など、ユニット会の後に再度復習することもある。また、年度替わりには、合同ユニット会議を開催するほか、複合施設全体で、年4~5回全ての職員が参加した職員会議を実施している。必要に応じて、その日の出勤職員で話し合いをしている。さらに、ユニット会などに参加できなかった職員には、口頭で申し送りをするほか、後日会議録を確認してもらい、押印をしている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	◎	スタッフ同士で些細な事でも気軽に話し合える雰囲気を作っている。お互いの意見を尊重し、相手の話を聞く姿勢を保持している。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	◎	ユニット会は毎月20日と決めて開催している。業務や行事の都合で開催が難しいと思われる時は、その都度日程調整を行い周知している。	/	/	/	
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	◎	申し送りとして口頭で伝える他、会議録を読んで内容を理解してもらっている。	/	/	○	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	日誌やユニット毎の連絡ノートを使って情報を共有している。	/	/	◎	事業所では、毎朝合同の朝礼を実施し、申し送りをしている。また、その日の早出勤職員が、日勤や遅出等の職員の出勤時に、朝礼での申し送りの伝達をしている。さらに、事業所では、日々の介護日誌(申送りシート・朝礼シート)やユニット毎の連絡ノートに記録を残すとともに、出勤時等に職員は確認し、押印等をして確実な申し送りにつなげている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	職員が出動した際に早出がその日の申し送りを行う。また、大切な内容は日誌や記録シートで確認し、翌日以降の出動者も内容が把握できるようにしている。	◎	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	認知の為、主体的に何かしたいという返答はほぼ聞かれない為、職員主導で体操やレクを実施する事が多い。～したいと言われる方については、本人の希望が叶うよう対応している。	/	/	/	入浴前の衣類の準備や飲み物、ぬり絵や歌のレクリエーションなど、職員は選択肢を絞って二者択一などで利用者に関わり、自己決定してもらえよう努めている。利用者からはゆっくりと話を聞き、「わからん、どっちでもええ」などと言われることもあるが、利用者の思いなどをくみ取るようにしている。また、利用者や接する場合には、職員は明るい表情や声かけを心がけて接しているほか、好きなレクリエーション時や人混みを避けた花きセンターへのドライブ時などに、利用者の生き生きとした表情が見られるよう支援している。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	自己決定できるような問いかけは出来る範囲で実施している。問いかけでも「分からん」と言われる方もいるが、二者択一にするなど、なるべく自己決定できるような問いかけにしている。	/	/	/	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかるかに合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	傾聴して本人の思いを理解するよう努力している。理解が難しい方には、言葉や言い方を変える等の工夫をしている。出来るだけ、本人が納得できる生活を旨とした関わりを心掛けている。	/	/	/	
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	◎	起床や食事の時間など、ある程度決まったスケジュールはあるが、体調やその時々の状態、気分等で時間をずらす等の対応をしている。本人が気分よく生活できるように、生活リズムや時間配分を考慮している。	/	/	/	
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	◎	入居者に接する時は明るい表情や声で心掛けている。また、一人一人の性格や好みを把握し、どのような対応が気分よく受け入れられるか考えながら接している。	/	/	/	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるように支援している。	○	本人の表情や言葉、態度から気持ちを推察し、どうしたいのか伺いながら対応するよう心掛けている。また、生活のパターンからおおよその検討を付け、トイレに誘導したり間食を準備など不安や不快な状態を長引かせないよう努めている。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	拘束虐待委員会の活動を通して人権や尊厳についての意識を高める努力をしている。入居者の方々に対しては、共生の意識を持って、自尊心を大切にしたい対応を心掛けている。	/	/	/	複合施設として、3か月に1回拘束虐待防止委員会を実施して話し合うほか、年2回人権や尊厳等をテーマに取り上げた研修を実施し、職員は学んで理解している。日中に1人以上の職員がリビングで見守りしているものの、2人体制でのトイレ介助などに職員が追われ、歩行できない利用者が立ち上がる時など大きな声を出してしまったり、利用者や仲間になりすぎて、馴れ馴れしい言葉づかいをしてしまう場面も見られ、ユニット会等で話し合いをしている。また、居室への入室時には、事前に利用者へ用事を伝え、ノックをして入室をすることができている。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	普段から失礼のない対応を心掛けている。危険を感じる等急を要する時は大きな声が出る事もあるが、難聴の方や理解の難しい方には、声掛けとともにジェスチャーを交えるなどして目立たないような対応を心掛けている。	/	/	/	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	◎	入浴について希望があれば同性介助を行っている。トイレは各居室に設置されており、いつでも安心して使用してもらっている。	/	/	/	
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	居室に入るときにはどのような用事で入るのか説明してから入室している。本人が在室の際にはノックをして声を掛けてから入室している。	/	/	/	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	法令順守の勉強会を実施しており理解している。	/	/	/	
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けを求めたり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	入居者の方には、出来る事、得意な事をいかにさせる場を作っている。洗濯物を干す、たむ、ゴミ箱を折る、ナイロン袋を広げる等の作業を手伝っていただき、感謝の言葉をつたえている。	/	/	/	洗濯物干しやたむ、ゴミ箱折りなど、できることを手伝ってもらった場合には、相互に「ありがとう」など感謝の言葉を伝えている。利用者の高齢化等に伴い、利用者自身が出来ることは少なくなってきているものの、洗濯物をたたむ場面や、洗濯ばさみを取ったり、ハンガーからはずしてもらったりする役割を担ってもらったり、些細なことでも家事など利用者同士が協力し合うことができるよう支援している。また、認知症の進行から、不穏や居室を間違えることもあり、他の利用者が叱責トラブルになりそうな場面も見られるが、職員が間に入り早めの対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	理解できている。難しい場合もあるが、利用者同士の関係性を大切にしながら、助言や援助を行うようにしている。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が見えやすい機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	◎	おのおのの性格や認知の度合いを把握して、主導権を持たせつつもトラブルにならないよう声掛けをしたり、距離感を調節している。その時々雰囲気やリビングで過ごしている方によって、座る場所を移動するなどして入居者同士の関係づくりをしている。	/	/	/	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	善悪ではなく、お互いの気持ちや状態を伝え理解を求めている。難しいようなら、しばらく物理的に距離を置くなどして気持ちが収まるのを待つ等ケースバイケースで対応している。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	おおよそは把握できている。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	現在関わりのない関係や場所については知らない事が多いが、本人の話から知る事もある。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	面会に来られる方との交流はあるが、ホームから出向くことは少ない。個別の外出計画が、支援のきっかけに繋がればと思う。地域の盆踊りや地域のサロンに参加したこともある。コロナの流行で現在は実施できていない。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	居室でゆっくり過ごして頂けるよう案内している。また、いつでも来てください、と伝えて歓迎の意を表している。現在はコロナの為、タブレットやスマートフォンにて面会を実施している。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	コロナ流行の為現在は自粛しているが、誕生日に個別の外出を行っている。本人に希望があれば優先するが、希望が無い時は本人が喜びそうな場所を担当職員が計画して実施している。他は行事としての外出を毎月実施している。気候の良い時は、施設周辺を散歩して気分転換を図っている。	○	○	○	現在のコロナ禍においても、事業所のベランダや近隣の神社まで散歩をしたり、ドライブをしたりするなど、利用者が気分転換や楽しみが持てるよう支援している。また、敷地内にある畑に出かけて、サツマイモなどの成長を見守ったり、ベランダでゴーヤやきゅうりの栽培のお世話をしたりすることもある。重度な利用者も、中庭のウッドデッキやベランダに出て、外気浴をしたり、桜が咲いた花見の時期には車いす等で近隣の川沿いに出かけて、写真を撮ったりするなどの支援もできている。また、コロナ禍以前の誕生日には、利用者の好きな所に出かけられるよう支援しており、美術館や砥部焼の絵付けなどに出かけたりするなど、利用者や家族から喜ばれていた。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	コロナの為自粛しているが、例年は地区の祭りに参加している。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	○	重度の認知症の方も、施設周辺を散歩したり、外出を楽しんでいたいただけるよう場所や方法を検討して実施している。				
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	○	ご家族の対応で外出している。今年はコロナで自粛しているが、例年松山の盆踊りや三津への魚釣り、母体であるガリラヤ荘への行事参加など実施している。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	認知症の勉強会へ参加し知識の向上に努めている。日々の観察から、周辺症状が現れた時には、話し合いながら原因を究明し、安心して生活できるように取り組んでいる。				毎朝の体操や立ち上がり時のキープ、リビングに行くまで歩行器を使用した歩行訓練など、生活リハビリを取り入れながら、職員は少しでも利用者の心身機能の維持が図れるよう努めている。また、できることやできそうなことは、職員は見守りや待つ介護を心がけ、更衣時や食事の時には利用者自身にしてもらい、できた場合には「上手にできたね」などの声をかけ、利用者自身ができた満足感が得られるよう努めている。中には、更衣やくつを履くことを自身でできるもの、利用者自身が待てない利用者もおり、つい職員が手を出してしまう場面も見られる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	生活リハビリや体操、散歩等を行い、現在の身体機能が維持できるよう取り組んでいる。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	出来るだけ自身でできるよう安全に注意しながら、声掛け、見守りを行っている。出来ていなくても、その場で注意や指摘をせず、後で本人が気づかないよう手直しするなどして、出来たという満足感に水を差さないようにしている。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	個性や能力を踏まえて役割をお願いしている。				以前は、洗濯物たたみやトレイ拭きなどの手伝いは、利用者の取り合いになるような場面も見られたが、利用者の高齢化に伴い、できる役割や出番は減ってきている。洗濯物たたみの時には、洗濯ばさみ取りやハンガー外しなどの出番を作ったり、季節のちぎり絵の作成時には、折り紙切りや貼り付けなどの役割を担ってもらったりしている。また、エレクーンの好きな利用者には、弾いてもらい一緒に歌を歌ったり、編み物の得意な利用者には、生地でカレンダーを作ってもらったりするなど、楽しみごとが持てるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	制作などは認知症のレベルに合わせて、それぞれ違う工程をお願いなどの配慮をしている。何かを一緒にする中で、めいめいの役割が出来ている。楽しみは、それぞれ個性があるので、個別で対応することが多くなっている。	○	○	○	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	△	コロナの流行の為難しくなっているが、以前は夏祭りや秋祭りなどの地域の行事に参加していた。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	△	個人差があり、まったく頓着しない方もいるが、その人らしさという点を踏まえて対応している。				以前は、自分で髭剃りをして、職員が仕上げなどを手伝うこともあったが、利用者の高齢化に伴いできなくなり、職員が介助している。服を自分で選んで着ることもできていた利用者もいたが、多くの利用者が介助が必要になってきている。また、汚れや食べこぼしが見られた場合には、居室に移動してもらい着替えの支援もしている。また、着替え時の乱れなどが見られた場合には、職員はさりげないフォローをしている。さらに、重度の利用者にも、利用者に似合う服やその人らしい服装を用意したり、訪問理容で髪を整えたりする支援もしている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	持ち物は自宅ですべてのものを持参されており、本人の好みの物と思われる。カットや毛染め等こだわりのある方には、希望があればその都度対応している。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	一緒に相談しながら決めている。決められない場合は二者択一など、本人が決めやすいように対応している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	支援している				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	衣類などに汚れがあれば、自室で新しいものと交換している。不都合なことは、他の入居者が気が付かないよう対応するよう心掛けている。		○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	○	現在はコロナの流行の為、制限をしているが、希望があれば対応している。訪問理容を利用している。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	認知症で自分で選べない方には、職員がその人らしい服装を選んで着てもらっている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	おおよそ理解できている。				外部の委託業者がカロリー等を計算した献立を立て、複合施設の調理室を活用して調理をしている。各ユニットで炊飯を行い、お皿などに小分けにされた食材等が届けられ、配膳をしている。利用者の高齢化等に伴い、「魚嫌い、肉嫌い」などの意見は聞かれるものの、現在好みのメニューまでいわれる利用者はいない。毎月、複合施設として給食委員会を開催し、外部業者等に意見を伝えることができている。利用者と一緒に食器洗いやトレイ拭きをしているが、高齢化等に伴い、できる利用者は少なくなっている。コップや湯呑みは、利用者が用意した物を使用しているが、食器は複合施設の物を使用している。苦手な食材がある場合は、代替品を準備したり、利用者の食事形態に応じて、普通食やソフト食、やわらか食の対応もしている。現在のコロナ禍において、利用者と一緒にテーブルを囲み、食事を摂ることはできていないが、職員は利用者に声かけをしなが、見守りや介助をしている。また、事業所内でカレー作りやおやつ作りを利用者と一緒にすることもあったが、コロナ禍の感染対策で現在は実施できていない。さらに、利用者に楽しみが持てるよう、お花見弁当や祝い膳、忘年会時の寄せ鍋、季節に応じて焼き芋やそうめんなどを取り入れたり、事業所内で干し柿づくりや餅つき、すいか割などのレクリエーション行事を実施したりするなど、利用者が楽しめるような工夫もしている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	施設食を提供しているが、ご飯はユニットで炊いている。コロナ流行の為自粛しているが、入居者と毎月カレー作りをしたりしている。おやつを手作りするなどして、一緒に作る機会を大切にしている。			△	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	△	施設食の為、調理の工程はない。コップを洗ってもらったり、トレイを拭いてもらうなどは毎日実施している。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	おおよそ把握できている。苦手なものは提供せず、代替のもので対応している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	毎月の誕生日の祝い膳として、ちらしずしが出たり、季節ごとの行事食が提供されている。流しうめん、芋炊き、鍋などできる範囲で季節を感じ取る取り組みを行っている。ユニットで出来る範囲でおやつは果物やいも、和菓子など季節感のあるものを提供している。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いんどりや器の工夫等)	○	施設として対応している。普通食、柔らか食、ソフト食があり入居者の嚥下状態や体調に合わせて提供している。低栄養の方にはエンジョイゼリーなどの補助食が提供される。盛り付けもメニューによって工夫してもらっている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	食事の時の食器については施設のものであるが、湯飲み、コップについては自宅から持参して頂いたものを使っている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	△	一緒に食べられる状況ではないが、食事中は傍にいて見守り介助を行っている。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	△	コロナの流行の為現在は自粛しているが、流行前はカレー作りやおやつ作りを通して実施していた。現在は炊飯のみユニットで実施している。		◎	○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	施設食の為栄養士が管理している。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	水分が進まない入居者には施設で作るゼリーで代替したり、栄養状態に合わせて、個別で補食を提供するなどして対応している。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	献立や調理については栄養士が管理しているが、毎月給食委員会を開催しており、栄養士と職員が食事について話し合う場を設けている。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	運食の場合は冷蔵庫で保管後、2時間を限度とする、毎週冷蔵庫の掃除、消毒をするなどルールを決めて衛生管理を実施している。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	勉強会に参加して理解を深めている。				利用者は、起床時と毎食後に口腔ケアをしている。各居室に洗面台があり、自室で歯磨き等をしている利用者もいるが、手狭になることもあり、共用空間の洗面所で口腔ケアをしている利用者も多い。介助や磨き残しの仕上げをしている利用者の口腔ケアの様子は確認できているものの、自身で歯磨きをしている利用者の口腔内の様子までは確認できていないため、定期的に全ての利用者の口腔内の状況を把握することを期待したい。また、重度化で、うがいができない利用者には、リステインを使用し、スポンジブラシで拭き取り、清潔保持に努めている利用者もいる。さらに、昼食前には、口腔ケア体操を取り入れている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	概ね把握しており、必要に応じて歯科の往診を依頼している。自立の方については口腔体操の時に舌の状態を見たりたり、仕上げ磨きをして確認している。			△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	研修や勉強会等で学んでいる。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	自己管理が難しい方については夕食後預かり、職員が対応している。毎日、入れ歯洗浄剤を使用して清潔を保持している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	◎	起床時、毎食後の歯磨きを励行している。義歯の自己管理が難しい方は職員が対応している。				
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医を受診するなどの対応を行っている。	◎	異常が見つかった時には、歯科に往診を依頼している。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	施設内の研修や外部の研修に参加して理解を深める努力をしている。				高齢化等に伴い、ほとんどの利用者は日中も紙パンツやパッドなどの排泄用品を使用して過ごしている。排泄用品の使用時には、職員間で話し合い、家族等に確認をして使用している。また、ファイバーやオリーブオイル、水分摂取、運動、腹部マッサージなどの便秘対策をしているが、半数ぐらいの利用者は医師と相談し、下剤などを服薬している。さらに、「総合記録シート」に排泄状況等を記録を残して排泄パターンを把握し、声かけやトイレ誘導をしている。各居室にはトイレが設置されているものの、退院時の立ち上がりからすぐに排泄ができるよう、ポータブルトイレを使用することもある。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	◎	施設内の研修に参加し理解を深めている。また、日々の介護から便秘の及ぼす影響を理解できている。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	記録に残す事で大体理解している。認知の進行や体調によってパターン通りにいかない事もあるが、想定内となっている。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	訴えない方も、本人の様子を見てトイレに誘導するなど、立位が難しい方は二人介助で行うなどトイレでの排泄をあきらめず取り組んでいる。また、日中と夜間のパッドを使い分ける、夜間のトイレ誘導を行うなどしている。	◎		○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	◎	トイレの場所、トイレの座り方が分からないなど、認知の為支障をきたしている事があれば、トイレのマークや文字、絵などで分かりやすく示したり、誘導して助言するなどの対応をする。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	◎	食事の前後や散歩の後など、本人が思いつきやすいタイミングに合わせて声掛けや誘導を実施している。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういつ時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	本人の判断で決定するのは難しい為、特別な変更があるときには家族に相談して了解を得ている。自己決定ができる方は、家族と本人が相談して決定している。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	◎	実施している				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	◎	ファイバー、オリーブオイル、水分摂取、運動、腹部マッサージ、温電法などの取り組みを、個々の状態に合わせて実施している。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	○	おおよその入浴日、時間は決まっているが、希望があれば個別対応に応じている。	◎		○	週2回、午前中に利用者は入浴することができる。利用者の希望に応じて、湯加減や入浴時間、同性介助の対応もしている。また、利用者の状態に応じて、リフト浴を使用しているほか、複合施設の2階にある特殊浴槽を使用して、安心安全な入浴を支援している。脱衣場には床暖房なども設置され、利用者は急激な温度差を感じることなく、入浴をすることができ。また、入浴を拒む利用者には、時間や日にちを変えたり、声かけなどに工夫をしたりしながら、入浴してもらうことができている。さらに、入浴時には、ゆっくりとお話をしたり、ゆず湯などを取り入れたりするなど、利用者が楽しむことができるよう支援している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	○	湯加減や入浴時間など本人の希望に合わせて実施している。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	洗体、洗髪、浴槽へのまきぎなどできる範囲で本人に行ってもらっている。その際、転倒に注意して介助を行っている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	本人の気分の良い時を見計らって、入浴に誘っている。もし、拒否が強い場合は、時間や日にちをずらすなどの対応している。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴前にバイタルを測定している。入浴後はバイタルの測定はしていないが、スポーツドリンクを飲用して頂き、自視で体調に変化がないか確認している。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	睡眠時間や様子を記録に残しており、おおむね把握できている。				認知症に進行から、昼夜逆転や夜に眠れていない利用者もあり、夜間にテレビを見てもらったり、飲み物を飲んでもらったり、職員が見守りをすることもある。日中の利用者の散歩やレクリエーションなどの活動量を増やすなどの生活リズムを整えながら、夜間に利用者が安眠できるよう努めている。また、体調面を考え、看護師や医師と相談しながら、服薬をしている利用者もいる。さらに、居室内に体感のセンサーを取り付け、利用者の転倒や移動などを把握に努めている利用者もいる。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	散歩やレク活動で日中の覚醒を促している。眠くなるまで時間がかかる方や中途覚醒して眠れない方は眠くなるまでテレビを見て過ごすなどしてもらっている。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	日中は散歩したり、鯉にエサをやりに行く等して日光に当たる機会を作っている。不眠が続く方については看護師に普段の様子を報告し、主治医と相談しながら薬の調整を行っている。			○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	実施している				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	△	コロナ流行前はご家族が面会に来られており、電話や携帯のやり取りはホームとしては実施していない。現在はテレビ面会を実施している。個人で携帯を持たれている方は毎日連絡を取り合っておられる。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	△	携帯を持たれている方は毎日連絡を取り合っておられる。所用でご家族に電話をした時などに話してもらう事もある。面会はテレビ電話で対応している。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	△	現在の所、入居者、家族とも要望が無いが、希望があれば対応できる準備はある。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	△	手紙やはがきが届くことは年賀状くらいでほとんどない。書簡は本人が管理している。要望があれば連絡を取り合う準備はある。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	△	携帯を持たれている方は毎日連絡を取り合っておられる。家族に電話したいと希望がある時は対応しているが、現在は特に希望される方はおられない。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	自由と尊厳の維持という意味で理解している。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	以前は希望される方が月2回の移動販売でおやつなどを購入されていたが、現在は希望者がいないため実施していない。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	△	月に2回移動販売車が来ており、主に利用している。それ以外は大型スーパーを利用することになる為、特別な理解や協力は依頼していない。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	家族の判断で金銭の所持はしていない。お金が必要になる場面があれば、施設で替えて対応している。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	話し合いをして賛同して頂いている。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	必要物品があるときや、訪問美容、外出や外食で現金が必要な時は、その都度家族に連絡し、施設で替える許可をもらって対応している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	△	出来る範囲で要望には応じている。多様なニーズが発生しているという認識はまだない。	◎		○	利用者や家族から出される要望は少なくなっているものの、事業所では可能な範囲で柔軟に対応している。コロナ禍以前は、誕生日に利用者が行きたい場所に行けるよう支援しており、要望に応じて美術館やペットのふれあいコーナーなどに出かけることができていた。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと		
(3) 生活環境づくり											
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	△	複合施設の為、玄関や建物周囲は施設が工夫している。ホームの入り口は季節ごとに飾るなどして明るい雰囲気になるよう配慮している。	◎	◎	○	複合施設の1階に事業所はあり、整理された共用の玄関を使用している。玄関に入ってすぐ事務所があり、職員が快く対応や案内をしてくれている。また、事業所には各ユニットに入り口があり、玄関から近く入りやすくなっている。		
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。)	○	木材を使用したぬくもりのある環境が整えられている。入居者とともに作成した絵や塗り絵を飾るなどしている。	○	○	○	事業所の案内には、「のんびりと穏やかに 安心して過ごせる空間づくり」が掲げられ、共用空間は広く、利用者はソファやテーブル、居室など思い思いの場所で過ごすことができている。壁には、利用者が布を活用して作成したカレンダーのほか、塗り絵やちぎり絵の大作が飾られ、季節を感じることもできる。また、以前に台湾からの来訪した実習生と一緒に作成した、風鈴のような飾りが天井から吊るされている。さらに、毎日職員が清掃して清潔保持に努めるとともに、加湿器やオゾン発生装置、床暖房の設備が設置され、快適な空間となっている。加えて、リビングからテラスや中庭にあるウッドデッキに出ることができ、利用者はお茶を楽しんだり、敷地内にある簡易の水路には鯉を飼育され、餌やりが日課になっている利用者もいる。		
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	毎日掃除をして清潔を心掛けている。					◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	季節ごとの飾り(毎月の壁面、クリスマスツリー、節句人形)やおやつ作り(おはぎ、かき氷、焼きいも)、テレビ番組(高校野球、紅白)、植物(あじさい、梅)、野菜(ゴーヤ、さつまいも)の収穫など、少しづつではあるが取り組んでいる。	○					○
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	状況によって、過ごす場所を変えたり、部屋で自由に過ごす時間をとっている。	○					
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	◎	最初から見えない構造になっており、特段の工夫は必要ない	◎					
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	家族によって受け取り方が変わってくる。きれいなものをと、購入して来られる方もいるし、自宅から持参される方もいるが家族が本人にとって大切で必要と思うものは持参して下さっている。居室を写真や絵できれいに飾っている方もおられる。	◎			各居室には、トイレや洗面台、エアコン、ベッド、床頭台が設置されている。利用者はタンスやテレビを持ち込んだり、写真や花を飾り、一人ひとりに応じた空間づくりをしている。また、入り口は引き戸で、居室番号や名前が表示されているほか、利用者自身が分かりやすい飾りや暖簾が掛けられている。		
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	木材を使用した、温もりのある環境が整えられている。必要に応じて、ベッドでの立ち上がりの為のL字パーや夜間の動向を把握するためのセンサーなどを設置して、自分でトイレに行く際は安全に配慮して見守りを行っている。				○		
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	居室の入り口にに表札や矢印を付けて、間違えて他者の居室に入らないように工夫している。						
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	△	雑誌、新聞などは手に届くところに置いているが、他のものは安全の為、入居者が希望した時に職員が渡す様になっている。自立の方であれば、自室に必要と思われるものを置いており自己管理している。						
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)	○	施設する事の弊害は認識している。現在は日中は施設せず過ごしている。夜間のみ施設している。	◎	◎	○	職員は施設内研修や勉強会で、鍵をかけることの弊害について理解している。複合施設の共用の玄関は日中解放され、来訪者等の出入りはセンサーチャイムで把握することができる。事業所の入り口は2か所あり、日常的には解放されているものの、現在は不穏な利用者があるため、片方の入り口は施設する場合もある。また、夜間は防犯のため、20時から6時頃まで施設されている。		
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施設を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話合っている。	○	現在施設を希望する家族はおられない。日中は開錠での生活を実施している。						
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)。	○	離設する可能性のある方のファイルを作り、事務所、他事業所へも協力をお願いしている。施設の玄関(事務所前)に赤外線センサーを設置し外出される方へは挨拶、確認を行っている。						

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	入所前のアセスメントシートにより、把握するようにしている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	総合記録シートを活用し、記録をこまめにとっており、異常の早期発見につとめている。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	看護師に健康面での相談はいつでもできる。夜間もオンコール体制がきちんとしており、週ごとの振り返り(ダブルチェック)を看護師と行い、重度化の防止につとめている。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	本人・家族の希望を優先するようにしている。協力病院へ往診、受診の変更があればそのように対応している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	本人・家族の希望する病院で受診されている。体調に変化があれば、主治医に連絡を取り必要な情報を伝え、指示を仰いでいる。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	実施している。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	実施している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	実施できている。看護師が密に病院側と連絡をとっている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	◎	実施できている。看護師が密に病院側と連絡をとっている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	何でも相談できる関係が築けている。また、看護師の方からも記録を確認し、情報を収集している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	夜間はオンコールの体制がとれている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	看護師が毎日職員からの聞き取りと、入居者の健康状態を確認しにユニットまで足を運んでおり、体調に異常があった場合は早期発見に努め、主治医へ連絡をしている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	薬の種類等は把握している。薬の副作用等、理解が不十分なところは、看護師がフォローしている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	誤薬を防ぐためのマニュアルを作り、それに沿って服薬介助を行っている。必ず2人でチェックを行い薬袋の確認をしている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	状態に変化や不調の兆しがあれば随時看護師に報告し相談している。必要があれば、主治医に連絡して指示を仰いでいる。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	体調に変化があれば記録に残し、医療に情報提供できている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	実施できている。看取りの入居者については、ご家族にカンファレンスに参加して頂き終末期のケアについて、意向を確認しながらプランを立てている。また、変わった事があればその都度連絡して方針を共有している。	/	/	/	複合施設・事業所として、「看取り介護に関する指針」があるほか、事業所として、「重度化した場合の対応に係る指針」を整備し、入居時に利用者や家族に説明している。重度化など必要に応じて、家族等に再度説明するとともに、看取り介護を希望する場合には、家族は必ずカンファレンスに参加して医師や看護師を交えた関係者で話し合い、方針を共有して支援をしている。重度化した場合には、医療支援を希望して入院したり、2階にある特別養護老人ホームに転院した利用者もいる。また、複合施設に看護師が配置されているほか、緊急時には主治医と連絡を取れる体制ができています。さらに、事業所では、今までに4名の看取り介護を経験しており、職員には研修を実施するほか、看取り後には振り返りを実施している。看取り介護を支援した家族から感謝され、感謝状を持って来られたこともあり、現在事業所内に掲示している。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	実施している。主治医は施設の重度化、終末期のあり方について理解しており、医療の面で支えて下さっている。	○	/	○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	終末期の入居者について現状を把握しており、どこまでの支援が出来るのか、話し合いを行っている。	/	/	/	
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	入所時にも説明しており、理解は得ていると認識している。また、重度化、看取りになった時点で再度説明を行い理解して頂いている。	/	/	/	
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	体制は整えている。各専門職が出来る事を通して支援しており、介護の面ではこれから起こり得る変化について、知識を共有することで、ケアの内容について検討、準備をしている。	/	/	/	
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	実施している。不安な事を話して頂き、その都度お答えしている。	/	/	/	
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	研修や定期的な勉強会で、勉強している。	/	/	/	/
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	◎	マニュアルが準備されている。対応方法については、時期ごとに再確認をしている。	/	/	/	
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	施設として情報を収集し、朝礼や委員会等で情報を共有している。	/	/	/	
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	流行時には手洗いや手すりやドアノブなどの消毒を強化し、換気にも気を付けている。また感染症が疑われる入居者は居室対応するなどして、蔓延を防いでいる。	/	/	/	
		e	職員は手洗いやうがいなども徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	実施できている。手洗い、うがいに加え出勤の前後には検温して体調確認を行っている。面会の家族についても同様で、チェック表の記入、検温を実施してもらっている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	面会時に、利用者と一緒にイベント時や普段の様子などをお話している。				現在のコロナ禍において、事業所では面会制限を設けているものの、SNSを活用したオンライン面会のほか、ロビーとユニットを隔てた扉越しの面会にも対応している。訪問調査を実施した10月からは県内の警戒レベルも下がり、事業所では徐々に面会の緩和を検討している。また、現在は家族の参加できる行事案内も自粛しているが、事業所には家族会の設置があり、コロナ禍以前は年1回懇談会を実施し、意見交換をすることができていた。さらに、家族の面会時には、職員がお茶を出して歓迎するほか、利用者の様子を職員から伝え、話し合いをしている。加えて、事業所では隔月で、写真を多く掲載した「ほのぼの通信」を送付して、事業所内の様子を伝えたり、必要時には電話連絡をして様子を伝えることができてい
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	面会時には笑顔で挨拶し、本人の最近の様子などを伝えている。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	△	あまり家族が参加できるイベントなどは計画できていないが、外出や散歩などで協力はしている。		○	○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	隔月で「ほのぼの通信」を作成し、送付している。年に一度、家族会を行う。面会時には写真なども見ていただきながら、行事等での様子をお伝えしている。希望する家族には、プリントした写真をお渡ししている。		○	○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	ご家族の質問や要求があった場合は、報告するようにしている。不安に感じていることなどを把握できる場合は、それをふまえて報告している。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	面会時、本人の様子について話をし、現状は理解して頂いている。どのご家庭も、父母を大切にされており、特別な支援の必要性は感じていない。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	◎	外出行事や、費用の掛かるイベント参加などは、都度ご家族に確認をしている		○	○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	○	年に一度、家族会を実施している。コロナの流行で、現在実施できていない				
		i	利用者一人ひとり起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	今後の起こりうるリスクについては、できるだけ事前にお伝えするようにしている。				
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行っている。	○	面会時には入居者と一緒にイベント時や普段の様子などを伝えている。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	出来るだけわかりやすくお伝えできるようにしている。必要に応じて文書を送っている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	希望があれば対応している。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	利用料の変更などは、文書で案内を出し、同意を得るようにしている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	設立段階から、説明や理解を図っている。	/	○	/	複合施設・事業所として、町内会には加入していないものの、建物内にある地域交流サロンを活用して、地域の高齢者が参加できる地域サロンを開催したり、近隣にある障がい者の共同作業所「なかよし村」から、おかしなどの訪問販売や訪問喫茶を開催したりしてもらうなど、地域との交流が継続できるよう支援している。また、コロナ禍以前は、フラダンスなどの催しのボランティアを受け入れをしたり、民生委員や近隣住民の来訪したり、地域の盆踊り大会に参加するなど、交流をすることができていた。また、パンの訪問販売や移動スーパーの来訪もあり、利用者は楽しみにしている。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	○	普段からあいさつなどには気を付け、お祭りや盆踊りなどには利用者と一緒に参加させていたが、今年はコロナの為実施できていない。	/	×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	なにかあった時には、支援して下さる方もたくさんおられると思う。	/	/	/	
		d	地域の人気が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	○	以前は民生委員、ボランティアの方のほか、地域の方も面会に来てくださっていたが、今年はコロナの為来訪はない。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りしてもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	△	あいさつ程度のお付き合いとなっている。コロナのこともあり関係性は深まっていない。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	コロナ流行の為現在は自粛しているが、フラダンスやカラオケ等のイベント訪問に参加させていたが、地域施設(なかよし村、はばたき園など)とも交流しており、バザーなどのお誘いを受けている。	/	/	/	
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	△	近所への散歩、病院の利用など限られている。コロナが終息すれば、個別の外出で、地域資源を活用していきたい。	/	/	/	
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	△	近隣施設のイベント・盆踊りなどに参加させていたこともある。外出等で地域のお店にも協力していただいている。なかよし村や訪問喫茶が来られた時は、活用しているが今年はコロナの為実施出来ていない。	/	/	/	
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	利用者の参加はないが、家族や地域の方には参加してもらっていたがコロナの為、書面での開催となっている。	/	○	○	運営推進会議は、家族や民生委員、地域包括支援センターや社協職員、市担当者等の参加を得て開催している。会議では、利用者の状況や事業所での行事、事故・ヒヤリハット報告などを行い、参加者から一言ずつ意見をもらうことができている。また、会議と一緒にリフトの使用方法やケア方法を学んだり、さつまいもの苗付けやフラワーアレンジメントを取り入れたり、職員と茶話会をして意見交換をするなど、参加者が少しでも参加しやすいよう工夫している。さらに、今年に入ってから現在のコロナ禍において、書面開催となっているものの、参加メンバーには事前にアンケートを送付し、意見や助言をもらうことができている。事業所では、会議の内容を家族に伝えられるよう、会議録の送付などを現在検討している。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実績、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告している。	○	自己評価・外部評価の結果を含め、運営推進会議で報告している。	/	/	○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	参加者全員から最後にひとこといただき、出された意見は日々の取り組みに活かすようにしている。今年はコロナの為、アンケートという形で意見を伺っている。	/	/	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	コロナ流行の為現在は書面を送付しての書類会議となっている。流行前はリフトを使用してのケア方法の説明をしたり、入居者や職員と意見交換の茶話会、芋の苗植え、フラワーアレンジメントを実施している。	/	/	○	
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	◎	公表している。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	理念については、職員会などで重ねて確認を行い、入居者の気持ちに寄り添いながら、安心して生活できるよう取り組んでいる。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	ご家族には、入所時に説明させていただいている。利用者・地域の方に向けては、今のところ話す機会を持っていない。	○	○		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	基礎介護勉強会等を通じて、内部研修は計画的に実施するようにしている。外部研修も、偏りがないよう配慮しながら、内容に応じて参加している。				法人・事業所として、月1～2回施設内研修や勉強会を実施するほか、年2回リーダーが職員に個別面談を行うなど、職員のスキルアップに努めている。新任職員には、先輩職員等がついて指導をするほか、段階的に面談を実施し、職員育成に努めている。複合施設には施設長がいるほか、代表者も時には事業所に顔を出し、職員に声をかけることができている。また、今年4月に管理者が交代したが計画作成担当者等として以前から勤務しており、現在も職員と一緒に現場の業務に入り、普段から職員に声をかけているほか、気になる職員には相談等にも応じていることをあり、思いや意見を伝える職員も多い。さらに、年1～2回ストレスチェックを実施しているほか、何かあれば、外部の「こころ塾」にいつでも相談できる仕組みづくりもできている。加えて、必要に応じて、職員の勤務形態を変更して働きやすい勤務時間帯にパート職員として働いてもらうなど、事業所は開設5年目を迎えるが、人事異動をした以外に退職した職員はいない。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	経験のある職員が多いが、新人職員にはOJTを通じて、計画的に育成している。開設以来、退職者は一人もいない。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	職場環境・条件の整備はできている。各自の向上心までは持っていないように感じる。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流の機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	グループホーム交流会で、他の施設との交流はあるが、十分ではないと思う。現在コロナの為、会自体が実施できていないが、DVDを配布していただき、ユニット会の中で観ていただくなどしている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	こころ塾の活用などで、ストレス軽減にとりくんでいる。	○	◎	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	毎月の拘束虐待防止委員会、拘束虐待防止勉強会に参加する中で、不適切ケアについて周知している。				複合施設として、毎月拘束虐待防止委員会で話し合うほか、年2回虐待や不適切なケアなどを勉強会を開催し、職員は学んで理解している。急を要する場合には、職員がつい大きな声を出してしまい、利用者をびっくりさせてしまったり、利用者と職員が仲良くなりすぎて、馴れ馴れしい言葉や冗談が不適切に聞こえることもあり、気になる場合はリーダー等に伝え、該当職員に説明や注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	実施できている。毎月、ユニット会を実施してケアについて話し合いをしている他、日頃から気が付いたことを話し合えるような環境を作っている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃されることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	◎	毎月の拘束虐待防止委員会、拘束虐待防止勉強会に参加する中で、周知している。				
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	実施している。				
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	毎月の拘束虐待防止委員会、拘束虐待防止勉強会に参加する中で、周知している。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	毎月の拘束虐待防止委員会、拘束虐待防止勉強会に参加する中で、周知している。ユニット会などで、実際の事例を話し合うこともある。				
		c	家族等から拘束や施設長の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	△	現在そのような要望はない。実際に要望があった際には、きちんと対応していく体制はある。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを理解している。	○	普段の仕事の中では馴染みがうすく、理解するのは難しい。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	△	いまのところ、相談等はない。実際に相談があった際には、きちんと情報収集を行い、対応していきたい。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	×	いまのところ、相談等はない。実際に相談があった際には、きちんと情報収集を行い、対応していきたい。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	意識不明等の急変に対してのマニュアルはあり、全体に周知しているが、怪我等個別のマニュアルはないが、研修で学習はしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	初任者研修で勉強した。消防署職員の救命講習(内部研修)にも、交代で職員が参加していく。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	事故報告書・ヒヤリハットとも整備されており、速やかに記入ができています。ただ、内容の閲覧まで、十分な検討まではできていない。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	実施している。センサーマットや緩衝マットなど使用したり、歩行が不安定な方には歩行器を使用する、歩行時は見守り、手引きをするなど実施している。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情対応マニュアルは整備されているが、苦情はでていない。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	△	いまのところ苦情はまだでていないが、実際に苦情が寄せられた場合は、速やかに対応していきたい。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	△	いまのところ苦情はまだでていないが、実際に苦情が寄せられた場合は、速やかに対応していきたい。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	相談窓口は作成しているが、いまのところ苦情はよせられていない			○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞くよう努めているが、高齢化等に伴い意見を言われる利用者は少なくなってきた。家族からは、面会時や電話連絡時を活用して、意見を聞いている。また、管理者は普段の業務の中で職員に声をかけるほか、気になる職員には相談等にも応じており、職員からよく意見が出されている。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	相談窓口は作成しているが、苦情はよせられていない	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	△	契約当初だけが情報提供できていない				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	現場に足を運び、話す機会を作っている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	職員の意見に耳を傾け、より良い支援の為の検討を重ねている。			◎	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	自己評価は数人の職員で行った。実施後の振り返りは全員に周知していきたい				外部評価の自己評価は、各ユニット毎に数名の職員でリーダーを中心に作成している。自己評価の作成は、業務の振り返りや新たな気づきが得られることも考えられるため、可能な項目を絞り込むなど、職員全員の意見を取り入れながら作成できることを期待したい。また、運営推進会議の中で、自己評価とサービスの評価結果は報告し、意見をもらっている。さらに、今回の外部評価のサービスの評価結果後には、職員に報告し、振り返りを予定している。コロナ禍以前は、家族や会議の参加メンバーに取組み状況などの確認をしてもらうことができていたが、面会制限もあり現在はできていない。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	○	前回の評価で明らかになった課題については、全体に報告し、また新しい取り組みの実施状況についても報告している。				
		c	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	目標達成計画を作成し、実際に取り組んでいる。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	結果は、各所に報告を行っている。昨年度はコロナの流行の為、家族会を実施できていない。	△	○	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	取り組みの様子は随時確認している。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	火災時の対応マニュアルは作成している。そのマニュアルに準じて、他の災害時にも行動できるように伝えていきたい。火災・地震の防災訓練を実施した。				複合施設が合同で、消防署の協力を得て、年2回火災や地震などを想定した避難訓練を実施している。事業所では、消防計画や防災計画など、対応マニュアルを作成している。また、複合施設では市行政から福祉避難所の指定を受け、水や食料、感染対策グッズなどの備蓄品を用意している。さらに、地域の防災訓練に参加協力することもできている。家族アンケートの結果から、災害の備えに対して理解が十分に得られていないことが窺えるため、「ほのぼの通信」を活用して訓練の様子を報告したり、コロナ禍の終息後の家族会等で話し合う機会を設けたりするなど、理解が得られることを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	実際の避難訓練は行っていないが、夜間の通報訓練などを通して、行動マニュアルを周知するようにしている				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	ガリラヤ久米全体で、物品の用意・点検を行っている				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	避難訓練で、消防署の協力を得て、指導等いただいているが、地域住民や他の事業所との訓練や話し合いはできていない	x	○	△	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	△	同上。地域の災害対策としては、不十分な面もあるが、地域の方と一緒に避難訓練を実施するなどの取り組みを行っている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	x	グループホーム単体での情報発信や啓発活動はできていない				事業所に直接相談が寄せられることは少ないものの、複合施設の居宅介護支援事業所等で、地域住民の相談に応じることはできている。コロナ禍以前は、複合施設の地域交流サロンの部屋を活用して、地域の高齢者等も参加できる地域サロンを開催することができていた。また、事業所への入所希望の見学や相談には、対応することができている。さらに、大学生の実習や中学生の職場体験の受け入れに協力したり、小野・久米地区グループホーム連絡会に参画し、意見交換したりすることができている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	居宅支援事業所で支援を行っている。グループホームでは、入所希望者の見学や相談支援を行っている		○	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	○	グループホームとしては場所の提供等できていないが、地域サロンを活用していただいている				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	東温市のガリラヤ荘と連携して、学生等の実習受け入れに協力している				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	△	グループホーム交流会で、他の施設との交流はあるが、十分ではないと思う。なかよし村の訪問販売などに参加させていただいている。地域の盆踊りや、お祭りの訪問に参加し楽しませていただいている。今年はコロナの為参加できていない			○	